

【ニセコの環境ものがたり】

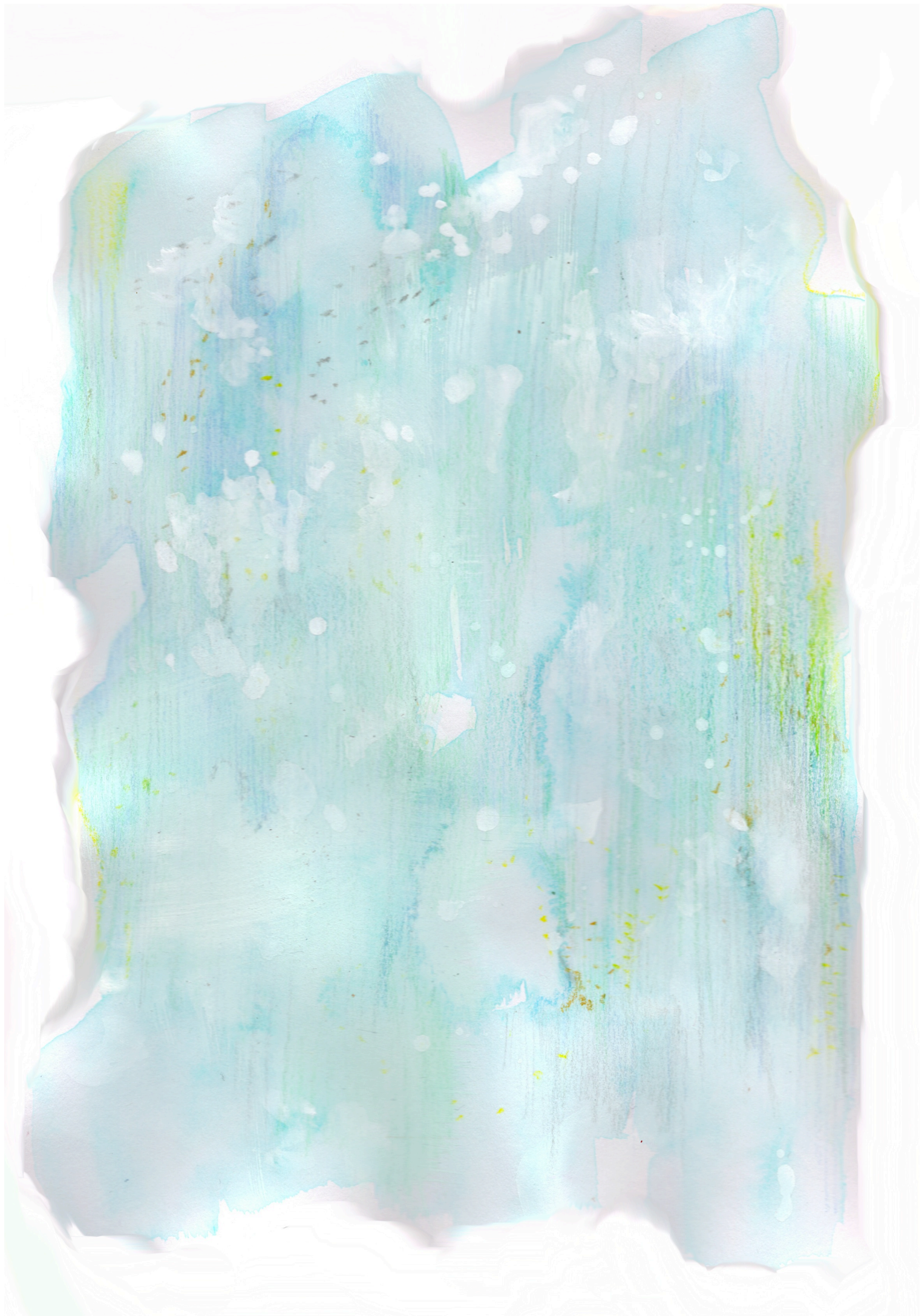
シリペツの声

【ニセコ環境ものがたり】 シリペツの声

※シリペツ……尻別川

【目次】

第一話	プロローグ	4
	川はどこに行くの	4
	タケオの川	5
第二話	川を下る	8
	尻別川へ	8
	パイラに挑む	9
第三話	シリペツとタケシロウ	16
	光の中で舞う水鳥	16
	河口は入口	17
第四話	尻別川とタケオ	21
	チライとの出会い	21
	いのちの楽園	22
第五話	タケシロウとシリペツ	30
	マサカリの刃跡	30
	森羅万象の向こう	32
第六話	タケオと尻別川	40
	チライが消えた	40
	ダムに向こう	41
第七話	エピソード	43
	川の生まれたところへ	43
注		46
あとがき		49



第一話 プロローグ

川はどこに行くの

いつの間にか、ぼくがたった一人でカヌーに乗っている。

さっきまで、お父さんが後ろに乗ってパドルでカヌーを操っていたのに、気がついたら、ぼく一人だ。

川は穏やかで、険しいプイラにさしかかっても、カヌーは岩にぶつかりもしないで、静かに乗り越えて行く。

激流で白い波が立っているのに水の音は聞こえないし、森の中の鳥たちも鳴いていない。

何だろう、この不安な気持ち。

ぼく一人だから？ いや、そうじゃない。

この川はどこに行くんだろう。

行先を知っていた筈だったのに、わからない。

知っていたはずの行先が違っていているような気がして、わからなくなっただ。

あ、川の向こうが、なんか光っている。

あの光は、なんだろう。

大きな塊のように明るく光って、周りの全ての色がその中に吸い込まれていく。

ぼくも、その中に吸い込まれていきそうだ。

そうか、わかった！ 川の行先って・・・

そこで、目が覚めた

ああ、そうだった。お父さんと約束していたんだった。

今日、尻別川をカヌーで下ってみよう、って。

お父さん、もう起きているのかな？

でも、さっきの夢は何だったんだろう。気になる。

「おとうさん、おはよう」

「おー、タケオ、起きたか。おはよう。今日は行くぞ」

「うん。あのね」

「どうした？」

「変な夢、見たんだよ」

「ん？どんな夢だ？」

「カヌーで川下ってるんだよ、ぼくとお父さん」

「へえー、じゃあ、夢で予行練習したってことか」

ぼくは、それ以上言わないでおこうと思った。だって、どう言っても良いかわからないし、言ったって、お父さん、どうせ変な顔するだけだろうと思ったから。

でも、ちよつとだけ、言ってみた。

「あのね、カヌーに乗って下っているこの川って、どこに行くのかなあ、って、乗っているうちに分からなくなった。そんな夢だったよ」

「ふうーむ・・・」

お父さんは、何か考え込むように、黙ってしまった。

「・・・そうか。でも、今日はカヌーに乗ってみよう」

「うん、そうだね。じゃあ、支度するよ」

「おう。出発は、そうだなあ、1時間後にしようか。お母さんにも、そう言っとけよ」

「うん、わかった」

夢のこと話したら、お父さん、何で黙ってしまったんだろう。ぼくの言ったことが、何か気になったんだろうか。

夢から覚めたあとの落ち着かない気分は、お父さんと話しているうちにだいぶ薄らいだけど、それとは別のことを急に思い出した。

四年生になって間もない頃、友達と一緒に自転車で東啓公園に遊びに行った帰り、いつも何気なく通り過ぎている芙蓉橋で自転車を停めて、橋の下の川を覗いてみようという気になった。いつもは自転車の上から眺めるだけだったけど、上流側で川が右に蛇行している光景が眼の隅っこに暫く残っていて、ずっと落ち着かなかったんだ。

自転車を降りて橋の欄干から眺めた深い青緑色の川は、記憶の中よりずっと不思議な感じの光景だった。川が流れているというよりも、うっかり油断していると川底に引き込まれそうな、ちよっ

と不気味な生き物の表皮のような感じがして、思わずのけぞってしまった。あわてて自転車に飛び乗り、逃げるように必死にペダルをこいだ。なのに、樹木の深い緑に染まったような川の青い色がなんてきれいなんだろう、自分でも思いがけない印象がそのあともずっと残っていて、何かの折にふつと思ひ出されたりもした。あれから、あの橋は、通ることがあつて川の色を見たいと思つても、覗きこむ気にはならなかった。川を見ると自分の中でぼく自身も知らない何かが目を覚ましそうな予感がして、怖くてイヤだった。

二、三日前に、お父さんから、一緒にカヌーで川を下ってみようか、と誘われたとき、やっぱりその時のこと思い出して、どうしようかと迷った。でも、お父さんと一緒なら大丈夫かもしれない、ぼくも少しは頑張ってみよう、と思つたんだ。

そういえば、お父さんはよく川に行くけど、あの時のぼくのような気持ちになることは、ないんだろうか。

タケオの川

「お母さん、おはよう。あと1時間でお出だつて、お父さん言つてたよ。ご飯できてる？」

「今すぐ食卓に出すね。お母さんも、車の係で一緒に行くよ」

「なんか、変な夢見た」

「さっきお父さんと話しているの、聞こえていたよ。お母さんね、

きつとタケオは川好きになるんじゃないか、って感じたよ」

「へえー、どうして？」

「さあ、どうしてかな。お母さんも、自分の気持ちなのによくわからないんだ。おかしい？」

「おかしいよ、自分の気持ちなのにさ」

と言ってから、いや、お母さんもそうなのかもしれないと思った。だって、ぼくもそんなこと多いもの。ご飯食べながら、昨日の学級会のことを思い出した。

「今日の学級会は、みんなのできる環境美化について、話し合います」

「先生、環境美化って、ごみを拾うとかのこと？」

「そうだけど、ナオキくん、何か意見があるの？」

「クラスの全員が、一斉に学校の周りのごみ拾いするのが良いと思います」

「ぼくは、いやだな」

「シンヤ、どうしてだよ」

「なにも、みんなと一緒にしなくてもいいじゃないか。ぼくは、自分がしたい時にするよ。みんな一緒というのは、うつとうしくていやだな」

「そんなのがままだよ。みんな気持ちを一つにして一緒に何かすることは大事なことだ、って、先生もよく言っているじゃないか」

「そんなの、気持ち悪いよ」

結局、ナオキくんの意見にみんなの賛成が集まって、そうすることに決まったんだけど、ぼくは、どっちがいいか、決められなかった。正直言うとシンヤくんの気持ちに近いけど、ナオキくんの意見には反対しにくい空気を感じて、自分で自分のことが分からなくなっただ。ぼくは、シンヤくんの意見に賛成しようかと思っただけど、シンヤくんのように自分のことをはっきり言える自信がなかったし、みんなから仲間はずれにされるんじゃないかって不安もあっただ。自分のことなのに、どうしてこんなに自信がないんだろう。

そのときのことを思い出したら、お母さんのいうことに、妙に安心した。なぜなのか分からないけど、ぼくのお母さん、ほかのお母さんと違っていているみたいな気がする。それが嬉しいのは、どうしてだろう？

「ねえ、さっき、タケオが夢の話をしていたでしょ？あなたは、どんなふうに思ったの？」

「ああ、あの子も、いつの間にか、自分の内面と向き合うくらいにまで成長しているんだな、って、ちよつとびっくりしたよ。それに、おれとも違うふうに物事を受け止めて考えるとところがあって、正直言って、複雑な気持ちになっただ」

「それは、わかる気がする」

「おれは、自然の中でアウトドアを楽しむことに何の迷いも怖れ

も無かったし、その中で自分が確かに生きているって実感がある。それが自分自身への自信になって、他のいろんなことにも関心が広がってきたんだ。だから、タケオが、自然の中に入っていくことに不安や怖れのようなものを感じていることを知って、ちよつとショックだった。

でもね、タケオのその言葉が妙におれの気持ちにも影響したらしくてさ、川への漠然とした怖れのようなものを今初めて少し感じているんだ。自分でも、不思議だなって思うけどね」

「あなたって、そうやって自然の中で自分の生き方を見つけてきたんだよね。私も、そんなあなたとアウトドアを一緒にするようになって、それまでとは違うもう一人の私が私の中にいることに気がついた。それがうれしくて、自然の中にと様々な自分が顔を出してくるのが分かったし、そんな自分が自分の中でぶつかったりするのも、好きになったの。

でも、タケオは、どうなのかしら。私やあなたとは、自然への向き合い方が違って成長するかもね。そんなタケオと一緒に今日は、あなたにとっても、何か発見があるかもしれないってことね。」

「そうかもしれない。タケオの見た夢が、今日のガイドになるのかな。このカヌーはどこに行くんだろう、なんてね」

第二話 川を下る

尻別川へ

ここは、何度か通ったことのある比羅夫橋のたもと。お父さんとお母さんが、手慣れた様子でミニバンの屋根からカヌーを下ろして、コンクリートの護岸沿いに川まで運んだ。今までも何度か見てきたけど、こんな時のお母さんって、家にいる時と全然違って、お父さんと信頼し合っている仲間のように見える。ぼくは、秘かに、かつこいいなあと思っているんだけど、どうしてそう感じるのかまだよくわからないんだ。ぼくも、いつかその仲間の一人になれるんだろうか。

川岸に浮かんだカヌーの端を押さえながら、お父さんがぼくに、乗るよう目で誘う。出かける前にお母さんに手伝ってもらって、家でライフジャケットとヘルメットを身につけてきた。だからすぐに乗れる状態だけど、緊張して、頼りなげに揺れるカヌーを前に佇んでいた。お父さんもお母さんも、じつとぼくを見ている。乗り込んでしまったらもうカヌーから降りられないんじゃないかって、今朝見た夢を思い出して妙な不安が湧いてきた。でも、揺れる舟底の頼りなさがかえっておかしくて、いや、迷っている自分がおかしく思えて、踏ん切りがついた。自転車のサドルに腰を降ろすように、カヌーの前方にある横板にさっと潜り込んだ。芙蓉橋の上から眺めた時の、あの吸い込まれそうな恐怖心はまったく感じなかった。川に近い、ということだけで、川を上から眺め

た時とはまったく違う心持ちになるのかな。

「よし、上手だ。タケオは、パドルをひとつ持ってくれ。でも、使うことはないと思う。使ってほしい時は、お父さんがその時に教えるから。それと、お昼のおにぎりとか、川の地図とか、いざという時の着替えなんかは、濡れないようなバッグに入れてカヌーの横板に括り付けたから、カヌーがどんなに揺れても落ちる心配は無い。タケオは自分の身体だけしっかり支えて、川の流れと自分がひとつになるような感覚を楽しめば良い。この川がどこに行くのか、夢で見たその先まで行くぞ。そこには何があるのか、お父さんも楽しみにしている。何か、聞きたいことはあるかい？」

「何聞けば良いのか分からないから、いいよ」

「そうか。頼もしいクルーだ」

お母さんに見送られて、カヌーは川面をゆっくり滑り出し、比羅夫橋の下をくぐって、川の流れに乗って左右に揺れながら滑っていく。ぼくは、それでもやっぱり緊張して、舟縁を両手でしっかりと握りしめ、初めて目にする川の光景に眼を凝らした。

周りにはそんなに背の高くない河畔林に囲まれて、野鳥の声や水の流れる音が少しずつ耳に入ってくるようになった。フツと、学校の廊下を歩いているような気がした。変だな、どうしてだろう。ちよっとおかしい気持ちが出て、何気なく後ろのお父さんに目をやった。あ、いる。よかった。あー、なんだよ、やっぱり、ぼくはまだ夢の気分を引きずっているんだ。これは、もう夢じゃない

のに。

プイラに挑む

川は、間もなく右に曲がった。

川の周りは森ばかりで、同じ森でも登山路や山の中とは違って、ふだん見たことも無いどこか不思議な感じのする光景に包まれている。この異様な感覚はどこからくるんだろうと思いつながら、前から時々お父さんに教わっていた木の種類を思い出しながら、比較的明るい両側の森をぼんやり眺めた。川そばに群生しているヤナギの背後に、ハリギリやエゾイタヤ、シナノキ、それに、ハルニレも見える。想像していたより細い樹木ばかりだ。

「両側の木を見ているかい？タケオは、もうだいぶ木の種類がわかると思うけど、針葉樹がほとんどないことに気がついた？」

「うん。どうしてないの？」

「尻別川の流域には、江戸時代から和人が入り込んで、当時高い値で売れたエゾマツやトドマツなんかを伐採して、この川に流して下流まで運んだそうさ。太平洋戦争が終わったあとも、戦後入植といつて北海道にわたってきた人たちの収入源に、広葉樹なんかも含めてかなり伐採したということだ。だから、ほら、まだ樹齢100年も経っていないような、そんなに太くない木ばかりだろう？」

お父さんは、この川が好きでときどきカヌーや釣りにきているからか、何でもよく知っている。そんな話を聞きながら森を眺めているうちに、河畔林も次第にうつそうとしてきて、樹木の葉が風でゆれる音や、さまざまな野鳥の鳴き声、水のゆったり流れる音なんかが、耳の中で心地良く響き合うようになった。

ところどころで川が二手に分かれたりするとところがあるけど、少し先にいくとまた合流したりする。川って、なんか、ウネウネと変化しながらうごめいている生き物みたいだ。

時々現れるそんなに険しくないプイラを、お父さんはカヌーの舳先を変えながら、すんなり越えていく。川が激流になっている所をアイヌ語でプイラと言うんだ、って、お父さんが教えてくれた。最初に出会ったプイラではちよつと緊張したけど、舟縁をしっかり掴んでいれば大丈夫というお父さんの声を聞いて、安心して揺れに身を任せられた。

「ねえ、プイラって、何となく感じが分かったけど、ずいぶんたくさんあるんだね」

「尻別川は、特にプイラが多い川じゃないかな。江戸時代が終る頃にこの川を辿った松浦武四郎って人が記録を残しているけど、それによると、プイラの数が一番多いのは、倶知安からニセコにかけての辺りで、そこだけで70カ所くらいあるんだ。もう少ししたら、少し大きめの険しいプイラが見えてくるよ」

「あ、あれがそう？」

川の流れを塞ぐように、ごつごつした岩が遠くから視界に入って

きた。ここから先へは簡単には通さないぞ、という自然の意思がそのまま形になったような、人間たち、いや、ひよつとしたら魚たちにとつても、本気度を試されるかのような、サメの歯が並んでいるように見えるプイラが、ぼくたちのカヌーを誘い込んでいく。ぼくは、思わずゾクツと身震いした。その瞬間、それまでさんざめくように聞こえていた野鳥の声や樹木の葉の囁きが消えて、川の流れの音が、水面すれすれのぼくの耳にゴオーツと飛び込んできた。舟縁を掴む両手に冷たい力が流れ込む。

「タケオ、これから、カヌーに乗ったままあのプイラを越える。乗り越える水脈は分かっているから心配はしなくていいが、かなり揺れるから、すぐ座り直せ。今座っている横板から腰を下ろして、舟底に膝を折るように座るんだ。まだ間に合うからゆっくりでいい。そして、両手で舟縁をしっかりと掴んでいろよ。眼は、水の流れをしっかりと追うんだ」

お父さんの声が、プイラに負けない激流となつてぼくの身体に流れ込む。言われたとおりにカヌーの中で身体をさらに沈ませ、カヌーの揺れに抗せるよう身構えた。

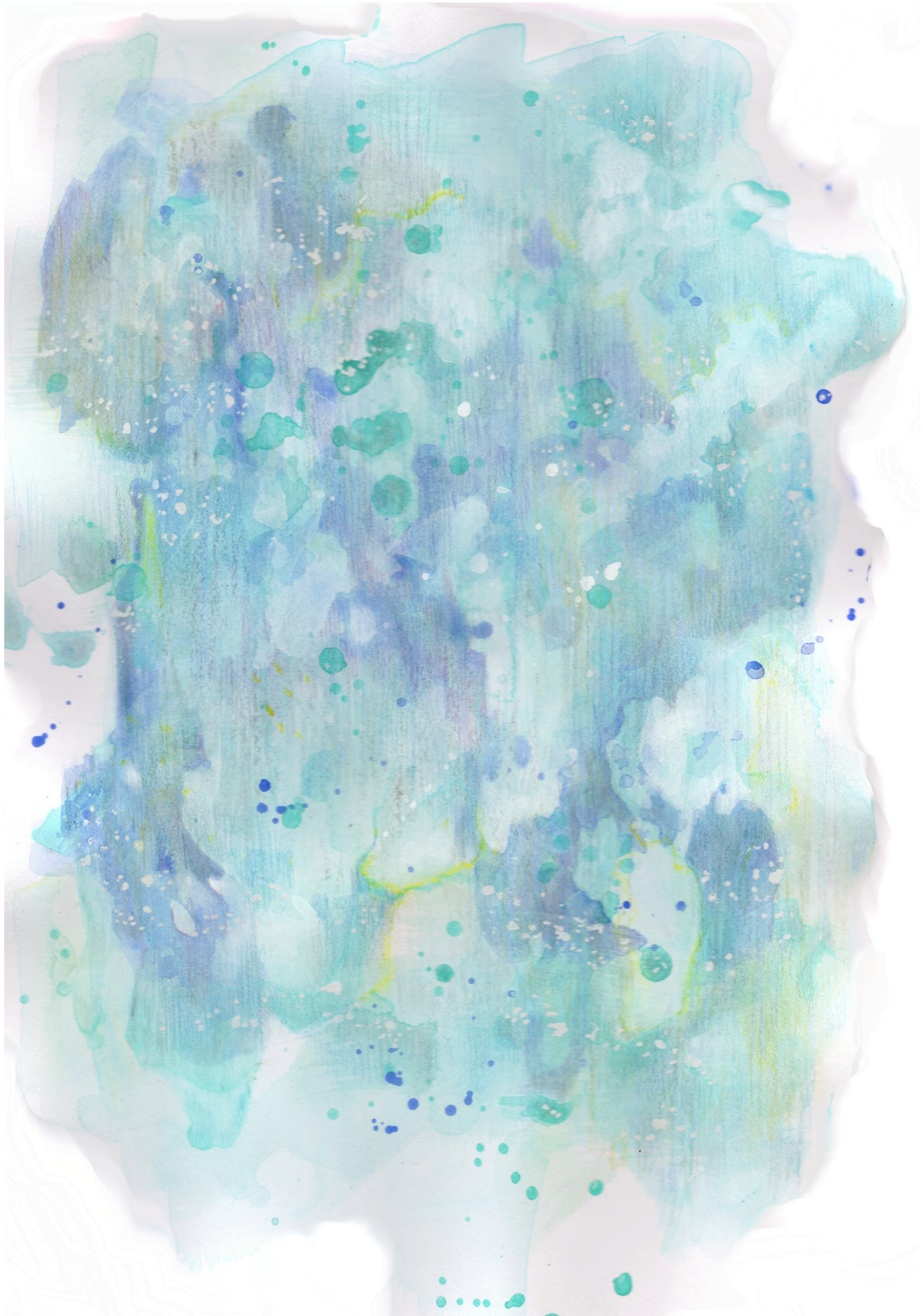
カヌーは、プイラの間近まで慎重に進んでいく。

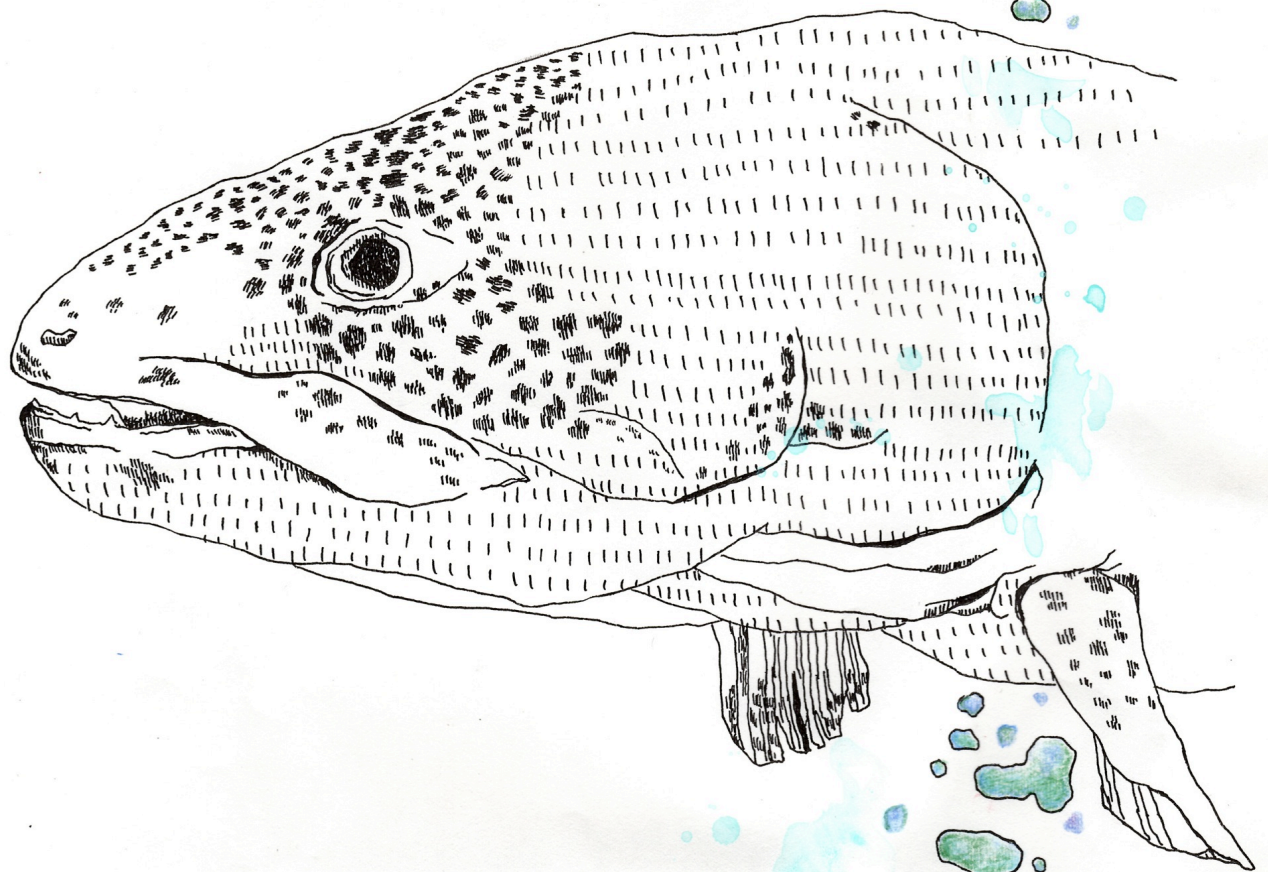
プイラが間近に近づいて、川の流れがやや速くなった。波がしわのように走って水の流れがはっきり見える。川底に大きくて滑らかそうな岩があちこちに沈んで、青色とも灰色ともつかない水の流れに押さえつけられてじつとしている。カヌーの揺れはそんな

に大きくなくて、川底の岩の上をゆらゆらしながらもすーっと滑っていく。

そのうち、川面から飛び出しているいくつもの大きな岩の間に入った途端、流れが大きく上下に揺れて速くなった。カヌーが激しく上下左右に揺れて、舟縁を掴んでいる両手が棒のように突っ張って力が溜まっていく。揺れながら水の動きを見ると、今度は、川底の岩が浮き上がってくるかのような錯覚を覚えて、その岩に引っぱりこまれそうで、背筋が寒くなった。すぐ前を見ると、激流となった川の水が岩の間になだれ込むように乱れながら流れていて、その先は、落差は小さいけれども白波をたてながら流下する滝がいくつも乱れ落ちていく。カヌーの舳先が上下に大きく揺れて川の中に潜り込みそうになったかと思うと、今度は天を指して突き上げられて、身体が後ろに落ちていきそうになる。舳先に水がなだれ込んで、水しぶきが顔を打つ。上下に激しく揺れるカヌーにしがみついている身体も頭の中もぐらぐらして、どこか異次元の空間にワープしていくような感覚に襲われた。後ろにいるお父さんを見る余裕も無いし、お父さんもきつと必死にパドルを動かしているだろうと思ひ、声をかけにくかった。でも、カヌーの舳先は、岩にぶつかりそうになるとスーッと岩を避けて流れに乗っていく。お父さんはパドルがうまいなあと感じたそのとき、もしその操作に失敗したらどうなるんだろう、という不安がかえって鋭く脳裏をかすめ、恐怖と一緒に、このままワープしていったらどこに行くんだろうと不思議な期待感も一瞬心をよぎって、自分が今どういう状態なのか分からなくなった。この大きな

岩たちって、ずっと前からぼくの心の中に形を変えて潜んでいたのかもしれない、と、わけの分からない妄想に襲われたとき、ぼくの視野の隅っこで、水中を悠然と舐めるようによぎっていく巨大な動く影を感じた。あれは何だろう？いつかお父さんが言っていたチライという大きな魚だろうか？でも、いまはほとんど絶滅に近い幻の魚と言っていたからそんなはずはない、といぶかしく思う気持ちが湧きあがった瞬間、いきなり大きな岩がカヌー舳先の真下から眼の前にぐわっと立ち上がるように現れて、ぼくは思わず「あああーっ！」と叫んでしまった・・・





第三話 シリペツとタケシロウ

光の中で舞う水鳥

川の流れに引かれたかのように西を指す磁石の針を読み、野帳に記入する。川が、前方で二手に分かれ、その先でまた合流している。どっちの川も、流れが急だ。大きい方を選び、左にゆるい蛇行を縫って、さほど険しくない十八番プイラを丸木舟に乗ったままどうにか越えて、深い森に挟まれた川幅の広い渚に出た。

「おーっ！」

「どうなさった、マツウラニシパ？」

「あれを見る、サノチ！」

突然、森と川の澱みの暗さを溶かしてしまうような光の塊が辺り一面を包み込み、舳先に座っていたタケシロウの視野に飛び込んできた。視野の前方を千々に乱れ飛ぶ粒のような光の飛沫が、二艘の丸木舟に降り注いだ。

「ヤマセミとキタカワガラスが、ずいぶんたくさん飛んでいる！きつと、渚にいる小さい魚の群れを狙っているんだ」

「わしは、どちらの鳥も初めて見るぞ。鳥の姿も異様で驚いたが、辺り一面が光背（こうはい）のように光り輝いているので、仏の国にでも出くわしたかと思ったわい。そうか、川の魚を狙ってひ

つきりなしに川に着水しているその飛沫が太陽の光を含んであのように輝いているのか。なんとも神々しい光景だな。シリペツは不思議な川だ。

わしがシリペツに強い関心を寄せて拘ったのは、川のほとりにそびえるしりべしやま（後方羊蹄山）への憧れとも使命感ともつかぬ思い入れがあるからなのだ。斉明天皇の時代に安倍比羅夫が政所を据えた我が国最北の地「しりべし（後方羊蹄）」というのは、この山の麓にあたるとわしは信じている。この山は、おぬしたちアイヌは、マチネシリともマツカリヌプリとも呼んでいるが、わしにとっては、「しりべしやま」と言う他はないのだ。わし以外の多くの和人は「しりべつやま」と呼んでおって、それも故ありと思うが、今の蝦夷地がおかれている状況を思うと、やはり、「しりべしやま」と言うべきではないかと、わしは強く思う。

さっきのような光がさんざめく光景に出くわすと、わしの思い入れもあながち外れてはいなかったと確信できる。それにしても、あの光の中で舞う水鳥たちには驚いたぞ。わしは自然の姿をいつも冷静に観察しているつもりだが、そんな自分にも自然の不思議に仏性を感じる心があるのかと思って、そのことにも驚いたな」

後ろの丸木舟から、イナヲテキが声をかけてきた。

「ニシパ、今夜はこの辺りで泊まりませんか。ここは、魚もたくさんいそう。わしらに任せてくれ」

「ああ、そうだな。きょうはプイラを十カ所ほど越えてきたの

で、そのたびに舟の荷物を陸に揚げ運んでは川岸から縄で舟を引いて、と、みなもずいぶん疲れただろう。きょうはあまり進むことは出来なかったが、この辺りのプイラの多さでは、やむを得ないな」

「あそこの森影に、懐のように奥まっている砂浜があるから、そこに舟を着けますぞ」

「わかった。そうしよう」

河口は入口

旧暦の八月と言えば、シリペツ河岸の夜は、もはやかなり肌寒い。川岸に上がって荷物を降ろしてから、皆で仮小屋を架けられそうな場所を捜した。背後に大岩がある一角を見つけ、その岩の間に近くの木を切って作った寄木をわたし、そこにフキの葉をかけて屋根にした。これで、今夜も夜露がしのげる。イカシクエはさっそく付近に散らばっている流木や森の中から拾ってきた枯れ木で火をおこし、火の神アペフチカムイに祈りを捧げた。さすがに山を歩き野宿に慣れているアイヌの手際は見事で、和人ではあのようにはいかないな、と、その都度タケシロウは感心して眺めている。

イナヲテキとネマキトクは、水鳥が騒いでいた淵の辺りにウグイかマスがいるはずだと言って、マレプとヤス、それに、叩き棒を持って出かけていった。程なく、五人で食すには十分すぎる程の

ウグイやホツチャレとなったマスを、細い木の枝に通して担いで帰ってきた。

「ニシパ、ありがたいことにウグイとマスが捕れた。昨夜のように持ってきた鹿肉を食っているのはこの先が心配なので、捕れてホッしましたぞ。」

「それは、ありがたいな。この辺りは、わしの記録では十八番目のプイラだが、シリペツに入ってからこれまでに、ハキイチャン、パンケメナ、ソウツケ、八番プイラと、既に4回の野宿を経て来た。今宵の十八番プイラからこの先もまだまだプイラがあるだろうと思うと、もはや帰るにも帰られず、先に進むしかないと覚悟はするものの、この先どのくらいの日数が掛かるのか見当がつかなくて、本当に心細い。心配なのは、持ってきた食料が間に合うかということだ。その点で、おぬしたちが漁で発揮する力というのは、本当に心強い。今夜は、これだけの魚を焼いて食せば、持ってきた米や鹿肉などに手を付けずに明日以降にまわせる。本当にありがたい。おぬしたちのおかげで、わしも心を強く奮い立たせることができる」

「マツウラニシパ、山のカムイにイナウを手向けてこれからの無事を祈りたいので、これからヤナギの木を切ってイナウを作るけれど、食事を待てますかな？」

「もちろんだ。おぬしたちが奉幣して祈ってくれるなら、わしも一緒に神に祈願するぞ」

カムイノミは、イカシクエが仕切った。カムイノミは、火の神ア

ペフチカムイへの祈りから始まった。明日からの安全を願い、山の神、川の神に祈りを捧げたいので、その途中で悪い神たちがいたずらしたり、邪魔をしないよう見守って欲しいと唱え、続いて、明日からの旅の無事を山の神と川の神に何度も祈願した。他のアイヌ三人と一緒に、タケシロウもイカシクエの後ろに座って、アイヌのカムイノミの所作に合わせて真剣に祈った。旅の行方に何等かの明るい兆しが訪れてほしい、それは、祈る者全員の共通する思いだった。

カムイノミが終って焼いた魚で夕食をとるときも、場の空気は重かった。せっかくみんなで祈ったのだからこの雰囲気を変えたいと思い、タケシロウは話しはじめた。

「以前から不思議に思っていたのだが、アイヌの考え方では、川は下流から始まって上流そして水源地で終る、と聞いたことがある。むしろ和人はその逆で、川は水源地で始まって下流そして河口で終る、と考えるので、どうも、アイヌの考え方がストンと腑に落ちてこない。だれか、わしにもわかるように説明してくれんか」

「ニシパ、そのことは、わしもコタンのエカシから聞いたことがある。むしろアイヌも、昔の考え方から少しずつ変わって来ているが、そのエカシが話してくれた事によると、川そのものが生き物なんだ。だから、頭や口もあれば、腹や尻もある。あそこだつてある、というんだ。今のむしろアイヌは、もうあまりはつきりとはそうは思わなくなってきたが、それでも、エカシのいうこと

は、わしぐらいの歳のものには、身体の中に何となく残っている感覚だよ。それがどうして変わって来たのか、わしにも解らないが、川が人だという感覚は、狩りや漁をしていると、よくわかるような気がする。特に、河口が人間の口だということは、実感できる。和人は、河口を出口と思うらしいが、むしろアイヌは、入口だと思っている。その口からいろんなものが川の身体の中に入るけど、むしろにとつて一番大事なものは、川の流れに逆らつてのぼっていくカムイチェプのような魚なんだよ。そして、カムイチェプは川のずっと奥で産卵する。だから、命が再び出会い生まれる川の奥まったところは、人間の胎内と同じところなんだよ」

イカシクエは、ニヤニヤしながら、さも大事な秘密を打明けるかのように、タケシロウに眼で合図した。

「だから、河口は、人間の口と同じだけど、生命を宿し産む入口という意味では、あそここの口でもあるのさ」

「なるほど。それで、おぬしたちはさっきニヤニヤしていたんだな。ようやくわしにも分かったぞ。すると、川は、アイヌにとつては、ただ魚を捕る大事な漁場というだけではなくて、人間や神と同じで、命の再生にとつて貴重な存在、ということか。むしろ和人にも、地域によつては、ヤマが神の胎内で、ヤマで命が生まれてサトやムラに出てくる、と似たような考え方があるから、アイヌのその考え方には、なるほどと頷けるところもあるな」

「ニシパは、噂に違わず、むしろアイヌの考え方を理解するのが

早い。アイヌの多くの仲間がマツウラニシパを信頼している理由が、よくわかるよ」

「そう言ってもらえるとわしも嬉しいが、わしにとっては、このシリペツつまり尻別川も、他の様々な川も、蝦夷地を旅する上での貴重な道だし、その分布や姿が蝦夷地に命を運ぶ血脈のようなものだから、その様子を見たいし知りたいと思って、こんなふう探索しているんだ。そのことは、おぬしたちにとっては理解に苦しむことなのかもしれないな。どうだ？」

カムイノミを司った能弁なウスアイヌのイカシクエに促され、アブタアイヌのイナヲテキも口を開いた。

「わしらにとって、川はカムイなんだ。川のカムイは、わしらアイヌの世界に魚を与えてくれる。そのことに感謝して、特にカムイチェプの季節になると、わしらは川のカムイに祈りを捧げてから、漁をしてカムイチェプを迎えるんだ。川って、わしらアイヌにとっては、そういうものだよ。」

だから、それ以上の何が必要でニシパがこんな苦勞をして川を下っているのか、何度説明を聞いてもよくわからないよ。でも、マツウラニシパなら、わしらに分からないことでも、それはわしらにとっても悪い事ではないだろうと信じられる。だから、こんなふうと一緒に旅するのが、どんなに大変でも嬉しいんだ。

それに、わしらは、川の決められた一部の場所を、それぞれのコタンの漁区イオルとして代々引き継いできたので、自分のコタン

のイオルでは自由に漁ができたけど、他のイオルを侵すことはできない。イオルは、コタンのアイヌが共に生きていけるよう、お互いの漁を認め合う仕組みなんだ。だから、アイヌはみんなそれを守っているんだよ。

だけど、川の入口辺りで和人がどんなことを行っているのか、噂は聞いているけど実際のところは自分の目で見た事がないから、誰にもなんにも言えないのさ。そこにマツウラニシパが現れて、こんなふうと一緒に旅して川の入口まで行けることになった。そこはこうなっているんだろうって、それを知りたい気持ちが半分、恐ろしい事実を知ることになるかもしれないという、怖い気持ちも半分なんだ。」

「わしの取調べのもうひとつの目的は、川の流域で和人もがどんなことをしているのか、それをつぶさに見て、明白な悪行が行われていれば幕府に報告して、止めさせることだよ」

「各地のアイヌは、そのことをニシパに期待しているんだよ。わしらが信じられる和人って、ほとんどいない。マツウラニシパだけなんだ」

それぞれの気持ちが高揚して、会話がさらに熱を帯びようとしていた。川の音と木々の葉の揺れる音が、会話に唱和するように深い闇の中で漂っている。一瞬会話が途切れて、沈黙がそれぞれの心の隙に入り込もうとした時、「バシャッ！」と、川面から大きな音が響いてきた。

「あれは、ひよっとしたら、チライが川面を叩いたのかもしれない。さつき澱みでイワナを捕っていたとき、巨大なチライの魚影を見たんだ。わしもこれまでチライの大きなものにはずいぶん出会ってきたけど、あんなに大きなチライは初めてだった」

「わしもこれまでにチライは何度も見たし、捕って食したこともあるが、他の川のアイヌとチライの話を交わした時、そのアイヌからも、シリペツのチライは他の川のと比べて魚体が長くてしかも太い、と言われた。なぜなのか分からないが本当にそのとおりで、他の川ではあまり聞かないほど大きな魚体のチライの話も、シリペツでは珍しくない。以前、わしのコタンのエカシにそのことを聞いたことがあった。エカシは、シリペツは特別の川で、生命力が並外れて大きいのだ、と言っていたな。そう言われて、なるほど、チェプも毎年たくさん捕れるし、他の魚も水鳥もたくさんいる。シリペツの口はどんなに大きいんだろうって、そのエカシと一緒に大声を出して笑ったことがあったよ」

タケシロウは、彼らの大きな笑い声を聞いているうちに、そのチライは我らと一緒に旅をしてきて、先ほどの会話にも耳を傾けていたのではないかと、ふとそんな妄想が脳裏をかすめた。

第四話 尻別川とタケオ

チライとの出会い

大きな岩にぶつかりそうになって叫び声を上げたぼくは、岩に碎け散って滝のように落ちる川の流れに巻き込まれたカヌーの舳先が、白い波の渦に叩き付けられた瞬間、大量の水しぶきを頭から浴び、胸がヒュッと縮まって一瞬息が止まった。ゆつくりと呼吸を整えながら無意識に閉じた眼をそつとあけると、そこには思いがけない光景が待っていた。

「あつ、さっきの魚だ！ きつと、チライだ」

プイラを乗り越え、まだその緊張を残しながらも穏やかな渚に入ったことを感じてほっとしたからだろうか。岩にぶつかる直前にサツと視野を過った魚影が、今度は安心した気持ちに寄りそうかのように、カヌーから手を延ばせば触れられるほどすぐそばまで近づいている光景に、ぼくは奇妙な懐かしさを感じた。そして、プイラで川に飲まれるかと思った緊張感があつたからこそ、このチライに会えたのだと直感した。自分でもわけがわからない涙が溢れてくるような気がして、水しぶきを浴びたのを良いことに、何度か眼をしばいた。

カヌーのすぐ斜め前方をゆつくり泳ぐチライをしばらく目で追っているうちに、ぼくはこれまで考えた事もなかった命というもの

の不思議に触れた気がして、身震いした。

「タケオ！ チライだ！ お前のすぐ目の前！ すごくかいぞ！」

「お父さん、ぼくもさっきから気がついてたよ！ すごいね！」
「こんな大きなのが、まだ生息していたんだ！ 数年前、倶知安の支流に自然産卵のチライが戻ってきたってテレビで報道していたけど、こんなには大きくなかったはずだ。1メートルをはるかに超えているぞ。絶滅が危惧されていたけど、尻別川ってどんなに懷が深い川なんだろう。おどろいたな」

「さっきプイラを越える時にも、カヌーのすぐそばを泳いでいたんだよ」

「へえー、そうか。タケオに寄り添っているみたいだな」

お父さんは、「さっきは大丈夫だったか？」と言わなかった。そのことがとても嬉しくて、なぜか誇らしかった。そんなことを感じながらチライを見詰めていた視野のすみっこに、突然、光の塊が飛び込んできた。

眼をカヌーの前方に向けると、燦々と輝く細かい光の粒が辺り一帯を埋め尽くすかのような光景が、眼の前に広がっていた。でもそれは、何か特別のことではなく、この場所ではずっと昔から繰り広げられてきた日常的な事のような気がした。

光の粒は、あの水鳥たちが川に潜るたびに川面に舞い上がって、太陽を取り込んで輝き、辺りを充たしているんだ。見たことのな

い形の鳥だけど、みんなきつと魚を狙っているんだ。

いのちの楽園

あ、チライが光の中に消えていく。

ぼくを誘っているようだ。

待ってよ、ぼくも行くから。

「タケオ、ヤマセミがずいぶん飛んでるぞ。あの、長い白黒まだらの尾っぽの鳥、頭の毛が耳のように立って長く生えているから、すぐ分るだろう？ 川の水がきれいなところにしか生息しない鳥だよ。百舌ぐらいの大きさの黒い鳥は、キタカワガラスだ。ずっと上空の方で、ワシもタカも何羽かゆつくり舞って、ヤマセミなんかを狙っているな。この場所はいつも水鳥がいるんだけど、今日はいつもよりずっと多い。あの巨大なチライが出現したことと、何か関係あるのかな」

ぼくは、お父さんの声を心の遠いところで聞いている。水の中で聞いているようなモゴモゴした感じの声に聞こえる。ぼくが溺れて、水の中で聞いている感じに近い。ぼくは、あのチライのあとを追って川の中を泳いでいるような、夢の中に浮かんでいるような気分になった。そんなふうに見えているわけではないけど、身体の中を水が流れているような、どこか懐かしい遠いところに自

分が漂っているような感じに身体を任せて、ゆらゆら揺れている。あ、チライがまた見えた。蛇行している川の淵に出来た激みに向かって、ゆつくり泳いでいる。まるで何かを狙っているような、静かで緊迫した気配を感じさせる。深いところだと思ふのに、どうして、チライの様子がこんなにはつきりと感じ取れるのだろう。ぼくの身体の中にも皮膚の表面も頭の中にも川が流れていて、そんなチライの様子を、他に何も考えずにただ眺めている。そんなぼくは、川になってしまったのだろうか。

「タケオ、ここは、魚がよく釣れるところなんだ。父さんも、釣りで来たことがある。ウグイやヤマベとかが多いけど、聞いたところでは、かつては、チライやサケもずいぶん釣れたらしい。プイラの入口は川の流れが少し速くなる平瀬から始まって、それから急に流れが激しくなる早瀬になって、そこから滝のように落ちて深い淵になっているんだ。釣り師は、そんなプイラの入口を瀬頭（せがしら）、出口を瀬尻と言っているんだよ。」

その瀬尻には、上流からさまざまな水生昆虫とか樹木の葉っぱと一緒に川に落ちた虫たちが流れてくるので、小さな魚はその虫を食べようと、瀬尻に集まってくるんだ。流れてくる虫たちの中には、カゲロウのように、瀬頭とかに産み落とされた卵がそこで孵化し、幼虫が瀬尻まで流れてきてそこで成虫になって、成虫はまた瀬頭に飛んで戻って産卵するという一生を、プイラとともに生きていくというのもある。そんな虫たちを食べようと集まってくる小さな魚をさらに狙って、大きな魚も混じっているんだ。さつ

き見た巨大なチライも、きっとその辺りに潜んで、小さな魚を狙っているかもしれない」

お父さんの声は、ポコポコ泡が浮き立つ音に混じって、水中のぼくの皮膚から身体に沁み込んでくる。耳から入る感覚ではなくて、水の微かな振動に皮膚が鼓膜のように震えて、くすぐったいけど、安らかな気持ちを誘う。何も考えていないし、何の感情も感じない。声も音も川の流れとひとつになって身体全体を包み込み、身体の中をただ流れている。

こんな感じになったのは、お父さんの声だから？ お母さんの声もそうだろうか？ じゃあ、先生や友だちの声はどうなんだろう？ いや、そうじゃなくて、ぼくがたった一人で川の流れの中にいるから、こんな気持ちになっているんだ。川の流れが身体の隅々に沁み込んでくるように、そう思えた。こんなふうに一人でいるって、ちっとも不安じゃない。そうだ、あのチライもきっと同じなんだ。チライと同じこの川のなかにいることが、とても当たり前のように感じられた。なのに、チライとぼくは仲良しでも何でもなくて、全然無関係なんだということにも、すごく納得がいく気持ちになった。

そのとき、ぼくは、澱みの奥に沢山のイワナが群れをなして泳いでいることに気が付いた。その瞬間、気配を消していたチライが、ぼくの身体を流れる川を突然スーッと突っ切って、イワナの群れに猛然と襲いかかった。不意をつかれたイワナは様々な方向に散

るように逃げ惑ったが、チライは、数匹の集団を淵の奥に囲い込むかのように、適度の距離を保って追っていく。周囲の状況を見極める冷静さを失ったイワナの集団は、淵の岸の手前で行き場を失った。チライは、動きの鈍った数匹に猛然と襲いかかり、あつという間にそのほとんどを嚙猛な大きな口の中に飲み込んでしまった。ぼくは、初めて見るその光景を、まるで自分もチライであったかのように、水流の乱れと同じ感覚で半ば平然と眺めていた。ねえ、チライ。君は、どれだけたくさん食べてそんなに大きくなったの？ 君が食べる魚が、この川にはそんなにたくさんいるんだね？

チライの行動で一瞬乱れた水流が、ぼくの皮膚にそんな妄想を撫で付けた。そうか、さっきお父さんが言ってたことは、こういうことなんだ。小さな小さな虫から大きな虫や小さな魚、そしてチライまで、いや、川の上空から狙っているヤマセミのような水鳥やワシ、タカまで、ぼくを包み込んで流れている川を介して、みんなそんなふうに繋がっているんだ。与えたり奪ったり、食べたり食べられたりするところが、この川の流れがあるから当たり前のように行われているんだ。虫も魚も鳥も、命って、川の流れがあるから生まれて、次の別の命に流れ込んでいく。ぼくは、川になったから、何の想いも感情も要らなくて、チライにとってもカゲロウにとっても特別ではないただそれだけの存在になれたんだ。チライの中にもそのような川が流れているから、たった一匹でも、悠然と生きていられるんだね。

ぼくは、澱みにじっと潜んでいるチライのそばまで流れていった。

チライが、そんなぼくと川の中でひとつになっっていることに無頓着を決め込んでいる様子を見て、孤独ってこんなに自由で、ちょっぴり誇らしい気持ちになれるんだ、と感じた。思わずカヌーのお父さんを皮膚で感じたくなって、身体をよじって視線を背中の方に泳がせた。

もう、夢の中やプイラを越えた時のような不安はなかった。お父さんがそこにいてもいなくても、ぼくはかまわなかった。そして、確信もしていた。お父さんは、カヌーの後ろで川になったぼくをじっとみているはずだ、って。





第五話 タケシロウとシリペツ

マサカリの刃跡

いくつかのプイラを越えて、二十六番プイラに掛かった。

両岸が肩を怒らせたように切り立ってそびえ、早瀬には大小の岩が競いあうように連なつて川の流れを遮り、その狭い間隙を盗むかのように滝となつて落ちていく激流が、丸木舟の通過を強い意思で拒んでいる。もう何度目だろうか。ここでも舟に乗ったままのプイラ越えを諦め、まずは川岸に舟を付けた。

ここは、これまでの中で最大の難所に思えた。タケシロウは皆に声をかけて、岸辺で一息入れることにした。持参していた干した鹿肉をかじりながら、どのように越えていったら良いか意見を言い合つた。川の流れを読む眼に長けているイカシクエの考えが、皆の納得を得た。

丸木舟の中の荷物を陸に揚げて舟を軽くし、川岸のすぐそばまで斜めにせり出すように幹を張り出していた太いミズナラの枝に縄をかけ、これを引いて舟を岸に引き上げた。川岸が急峻なため足場も容易に確保できない川縁を伝つて、四人のアイヌが早瀬の下まで一艘ずつ運び、川に戻した。岸辺にも大きな岩が複雑に連なっているため、なおさら足場の確保が難しい。厳しい作業だった。

この先このようなプイラがまだまだ続くのだろうかと思うと、昨夜のカムイノミが功を奏したのかどうか不安になつて、丸木舟が川を再び下り始めたあとも、重い沈黙が支配する。

日が傾き始めたころ磁石の針が南から西に転じ、さらに北から北西へと丸木舟の進む先がめまぐるしく変わり、三十番プイラに差し掛かった。トドマツも見えるうつそうとした森が川に覆い被さりヤナギが群生している西岸に、ひっそりと佇むわずかな砂地が見えたので、舟を着けた。

川筋が大きく蛇行しているその澱みに面しているためか、そこには、マサカリで切られたような跡のある大きな流木が数本、不規則に漂着したまま半ば腐食し始めている光景があつた。それは、これまで見てきたどの澱みにも、また、野宿した河岸でも目にしなかつたものだ。突然の出現に、皆その意味を受け止めきれぬまま暫し茫然と眺めていたが、イナヲテキが、思い当たつたように口を開いた。

「これは、わしらアブタイヌのイリカというものが、十年ほど前にこの辺りで切つて川に流したスルク、和人がエゾマツという木ではないだろうか。コタンのエカシに聞いた話を、今、思い出した」

「その話なら、わしも聞いたことがある」

ネマキトクも、記憶に促されたようにうなずいて、話を継いだ。

「エカシが生まれるずっと前には、飛騨屋久兵衛という商人がシリペツ周辺のスルクを伐採して流送していたが、思うように儲けられなくて、わしらアブタイヌやウスアイヌもずいぶんこき使わ

れてひどい目にあったということだった。それが、二十年ほど前から今度は、松前の柳屋庄兵衛という和人が同じように伐採を請け負って、わしらアイヌをただ同然で無理矢理働かせた。その様子は、わしも見聞きしているから知っている。その時、シリペツの現場に連れて行かれたうちの一人が、イリカだと言っていたよ」

ウスアイヌのサノチも話に加わってきた。

「わしらは、今回マツウラニシパと一緒に来る事が出来てとてもありがたいことだけど、これだって、わしらの意思でどうなることではなかったんだ。ニシパとフレナイ会所の役人とか良いようにしてくれたから、一緒に来れたんだよ。だから今回だけは、ニシパの言う事を聞いてくれた役人に初めて感謝の気持ちを持っている」

ネマキトクが、虚ろな視線を不安定に泳がせながら、呟いた。

「エカシが言うには、イリカは、十年ほど前にシリペツでももつとも険しい川岸のすぐそばで働かされて、大変な目にあつたらしい。その時の無理が祟って、去年の夏、死んだ。たった一人残されたハポが、恨み言をすべて自分の胸の裡に飲み込んで、誰の声かけにも何も答えずただじっと涙をこらえていた姿が、今でも目に焼き付いている」

「わしらウスのコタンでも、何人もの若いウタリが、会所の和人

によって殺されたも同然の死に方をしてきた。小さなコタンでは、もう人影がまつたところも少くないんだ」

暫く、沈黙が続いた・・・。

突然、イナヲテキが、大事な事でも思い出したように、突拍子もない声を出した。

「そうか！　ここは、シベツチャンなんだ！」

「シベツチャン？　それがどうしたんだよ？」

「エカシが言っていた。イリカが働かされていた場所は、シリペツでも最も苛酷なプイラのある場所で、シベツチャンというところだって。だから、イリカのマサカリの刃跡がある流木が見つかったここがシベツチャンの川下だ、という事なんだよ。ここから先は、ここまでのような険しいプイラは、もうないってことさ」

イナヲテキの話の意味を、みなが自らの裡に確かめているかのようない瞬の沈黙のあと、誰からともなく涙混じりの笑い声が沸き起こった。

「そうか！　じゃあ、これからはどんどん楽になっていくんだな？」

「そうだ！　ゆうべのカムイノミに、山のカムイ、川のカムイが応えてくれたんだよ、きつと！」

「イリカの切ったスUNKに教えられるとは、ウエペケレにあるスUNKの話とは違うが、わしらアイヌにとって、スUNKはカムイと

関連の深い大切な樹だつてことを思い出させるなあ」

「さすがにうまいことを言うな、イナヲテキは」

「その大切なスルクを和人に無理強いされて切ったイリカが死んで、切らせた和人にそんな罰がないとしたら、あまりにもひどい話で、カムイにチャランケしたいくらいだよ。」

「わしも、アイヌが和人によってこんなにひどい目に遭わされているのに、カムイはその様子を本当に見ているのだろうか、と、密かに不満を感じているんだ。いつも、そんな気持ちをカムイにぶつけたいと念じているけど、この思いはなかなか届かないようだ」

エリカのマサカリの刃跡がもたらした悲しい記憶と明日への期待が、アイヌの心を奮わせている様子をじつと見詰めていたタケシロウは、自分の心にも彼らの心情が沁み入ってくるような、密度の濃い感情の波を感じると同時に、周りからのそんな波によっても変わることはない、まったく違う場所に佇んでいる自分の心底を感じていた。自分の心の底には、こんなに信頼し合っている彼らアイヌの姿さえも見えない、どこか森閑とした自分一人だけの光景が、どこまでも広がっているように感じられた。それはまた、それ以外に有り様の無い、どのような感情とも想いとも無縁としか言いようのない、ただそのものという感じで独り立っている自分自身だった。

心の居場所を見失ったかのような面持ちで茫然と立ったままのタケシロウの様子を気にして、イカシクエが、心配げに声をかけた。

「ニシパ、今宵は、山のカムイ、川のカムイに感謝のカミノミを捧げたい。その前に、今夜食すチェプか何か魚を捕ってくるよ」
「ああ、そうだな。そうしてくれるか。わしも、皆と一緒に、神に感謝の気持ちを捧げたいと思う」

森羅万象の向こう

イナヲテキとネマキトクが、森の中に入ってしまった。もう少し上流で漁のポイントを捜すためだろう。同じコタン同士だけあって、あの二人は漁をする時も息が合っているようだ。それにしても、この辺りはイワナイアイヌの漁区となっているはずなので、今夜の漁については、あとで、わしの方から申し開きをしておくが、アイヌ同士でもあとで何かの交渉があるのかもしれない。わしのこの探査についてきてくれた事で、もし彼らの間でもめ事が起きれば、わしとしても申し訳が立たぬ。

タケシロウはそんな事を思いながら、サノチ、イカシクエと一緒に野宿の支度に掛かった。

カムイノミの準備もすませて一息ついたところに、思いのほか早く二人が息せき切って帰ってきた。イナヲテキが、見た事も無いほど巨大な魚を抱きかかえてきた。サノチもイカシクエも、驚いて二人に駆け寄った。

「これは、ひょっとしてあのチライではないか！」

「これまで見たことがない程大きなチライだ！」

「ああ、そうなんだ。わしらも目を疑ったが、この大きさから思うに、昨夜澱みで見たあのチライに違いない」

「ニシパ、聞いて下され。これを仕留めたイナヲテキの話を」

「これは、すごいぞ。イナオテキ、どういうことなのだ？」

「わしにもよくわからないのだ、これを仕留めた時のことは」

「仕留めたおぬし自身も、わからないとな？」

「そうなんだ。二人で少し手前の澱みでイワナを捕っていたところに、思いがけずこのチライがゆっくりと近づいてきたんだ。マレクを構えていたわしに向かってくるかのように、悠然と、ゆっくりと。そして、どういうわけか、そのときわしはこのチライの目線と合ったような気がしたくらい、このチライはマレプを構えていたわしの間近に、何の警戒心もなく近づいてきたんだ。こんなことは初めてなので、ふいに鳥肌が立って、構えていたマレプを思わず地面に落としてしまったくらい混乱した。わしの様子が変だと思ったらしいサノチが声をかけてくれて、わしは我に戻った。わしは、このチライに畏れ多い気持ちで湧いてきたので、叩き棒を手にもって、咄嗟に思いついた祈りの言葉を胸の中で呟きながら、このチライの頭を打ったんだ。その瞬間の気持ちは、これまで経験したことのないものだった。何と言って良いか、自分でも分からない。わしは、まだ頭が混乱しているようだ。ただ、一刻も早くこのチライのことをニシパに知らせなきゃ、と思つて、

すぐ帰ってきたんだ」

タケシロウも他の二人も、地面におかれた巨大なチライを茫然と眺めながら、イナヲテキの話を聞いていた。

「これは、やはりカムイが我らに授けてくれたものだと思う」

「ああ、きつとそうだ。そして、カムイは我らに何かを伝えようとしていたのかもしれないな」

「それは、どういうことだ？」

「わしにもわからない。だけど、これはただの漁ではない。マツウラニシパの目的に付き従ってここまでついてきたわしらのことを、カムイは支えてくれようとしているのではないだろうか」

「わしも、そう思う。ニシパ、このチライをカムイの元に帰すためのカムイノミを感謝の心で捧げたいと思うが」

カムイノミは、昨日以上に厳かな空気に包まれたが、皆の所作からは、抑えきれない興奮が滲み出ていた。

不思議な面持ちを隠しきれないまま、この日の夕餉は、チライを焼き、米の飯も焚いて、われらの想いが確実に神に届けられるようにと願いながら食べた。食事の後まで、皆の上気した会話が弾んだ。

「イカシクエ、先ほどのカムイノミだが、おぬしの祈りの心を教えてくれぬか。アイヌが、捕った魚も獣も神が客として訪れたも

のなので、そのことに感謝し神として大切に扱い、イナウをお土産に持たせて神の国に送り返すことは、わしも何度か見聞きしているのを知っている。だから、このチライにも感謝して、チライをふたたび神のもとに送り返す祈りだったと思うが、その神の国とは、どのようなものなのだ？ わしら和人にも森羅万象の様々なものを神と仰ぐ心はあるが、互いにどう違うのか、わしは理解できていないのだ」

「わしは、うまく語れないよ。そのようなことを改めて考えたことが、今までなかったからね。だけど、昨夜も、ニシパがわしらアイヌの心を理解しようとしてくれることがわかったので、今夜もわしにできる範囲で話してみるかな。

カムイノミをするときのわしの心は、どんなときも、一つの思いになるんだよ。コタンでカムイノミをするエカシから、わしはこんなことを言われたことがある。

カムイノミというのは、カムイに向かって礼拝したり、感謝したり、お願いするものだけど、同時に、自分自身の心にも拝むんだ。自分の心が淫らであつたら、その言葉はカムイに届かない。だから、カムイの前に、まず自分の心が一番大事なんだ。自分の心に嘘をついたら、神にも嘘をつくことになる。カムイへの真心は、まず自分への真心からだ、って、そのエカシによく言われたよ。

わしらの大地モシリをかたちづくっている川とか山や火、太陽や月、そしてそこに住むあらゆる動物や草木は、みんなカムイなんだ。たとえば山のカムイは、山の神の国カムイモシリに住んでいるんだ。人間も死んだら「死後の世界」に行く。そこでは、亡く

なった人たちが生前と同じようにコタンを作って、生前と同じように暮らしている。カムイモシリは、今わしらが生きているこの世界とほとんど同じなんだ。周りの樹木や動物たち、そして人間の姿も暮らしもコタンもみんな、この世と同じなんだ。ただ、鏡のように全てが反対らしい。どんな具合に反対なのか、実際に行ったことがないからよくは分からないけどね。「死後の世界」に赴いた人間は、その国で幸せな暮らしを永遠に続けていく。そして、重要なカムイもそれほどでもないカムイも、カムイ同士はお互いに尊重し合っている。そして、カムイモシリのカムイと、この世で暮らしているわしら人間も、対等なんだ。カムイの方がわしら人間より偉いということはない。カムイと人間は、互いに関わり合い影響を及ぼし合って成り立っているから、お互いさまなんだよ。だから、お互いに必要なものを贈るのさ。カムイは、わしら人間のため、さっきのチライのようにいろんな獲物の姿をまもってアイヌの食べ物をこの世に贈ってくれる。わしらアイヌは、わしらの感謝の気持ちを、イナウや酒や、加工し調理した食べ物などに託して、カムイモシリへ返礼するんだ。そんなときのあいさつが、カムイノミなんだよ。

わしは、コタンのエカシからそのように教えてもらったんだ」

タケシロウは、イカシクエの話を聞きながら、自分の歩んできた道が、これまで自分自身が思ってきたのとは違う意味合いを帯びて感じられたことに、内心少なからず動揺した。

アイヌには、生きて死んだ後に行くべき、納得できる世界がある

というのか。エリカの如き理不尽な生を余儀なくされた現世であつても、神の国でこれまでと同様自然の中で生きていけると信じているのか。神の国と人間の国の間を巡って神と人間を繋いでいるあのチライのように、自然の摂理に従って生きていくというのか。

わしら和人は、どうであろう。少なくとも自分は、この道の行き着く先を考えたことはなかった。蝦夷地の旅が自分の使命感によるものであることに疑いを挟むことはなかったし、この道が永遠に続いてほしいと無意識に願っている以上のことを、意識したことがなかった。なのに、イカシクエの話を聞きアイヌの神を知って、自分は どうしてこんなに動揺するのだろうか。

イカシクエたちの談笑が脳裏の片隅に切れ切れに流れて意識が朦朧としていたその時、闇夜を焦がす焚き火の炎に怯えたのか、タケシロウの動揺に呼応しているかのように、遠くの山間から、得体の知れない獣が頻りに「ヲヲヲー・・・」と鳴く声が聞こえた。

あれは、現世の声だろうか、それとも神の声だろうか。それとも、双方を繋ぐチライの、いや、シリペツの声だろうか・・・。

焚き火の暖かさと睡魔に誘い込まれたタケシロウは、ひと月ほど前に石狩川を調べた折、マ yaitou で野宿した時の不思議な心の体験を、うつらうつらと思い出していた。

—このようなどころであれこれ想いを巡らせても、その想いを伝えることはできない。できることなら鮭に化身して、上流に遡っていきたい・・・

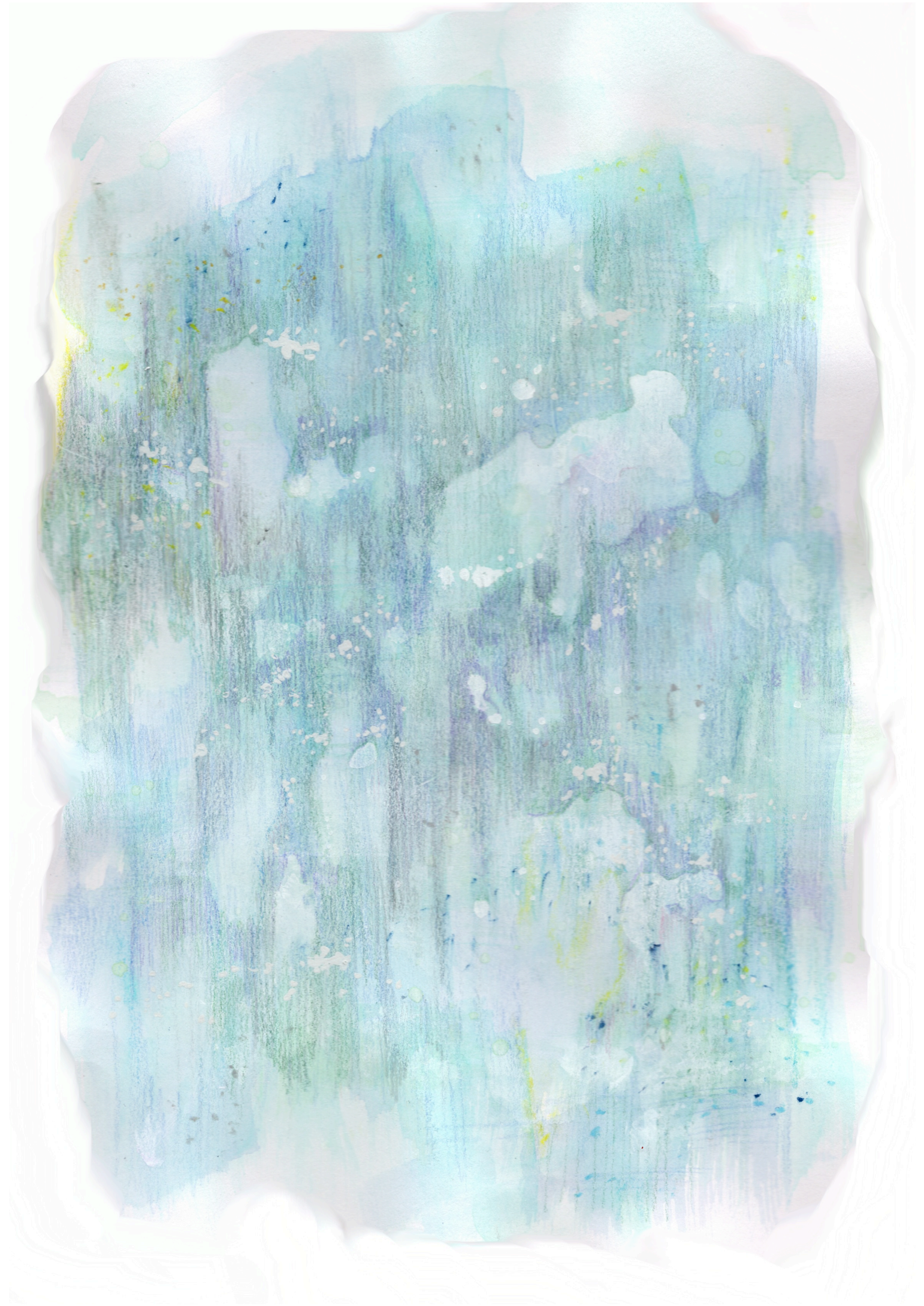
あのチライに促された、夢だろうか。

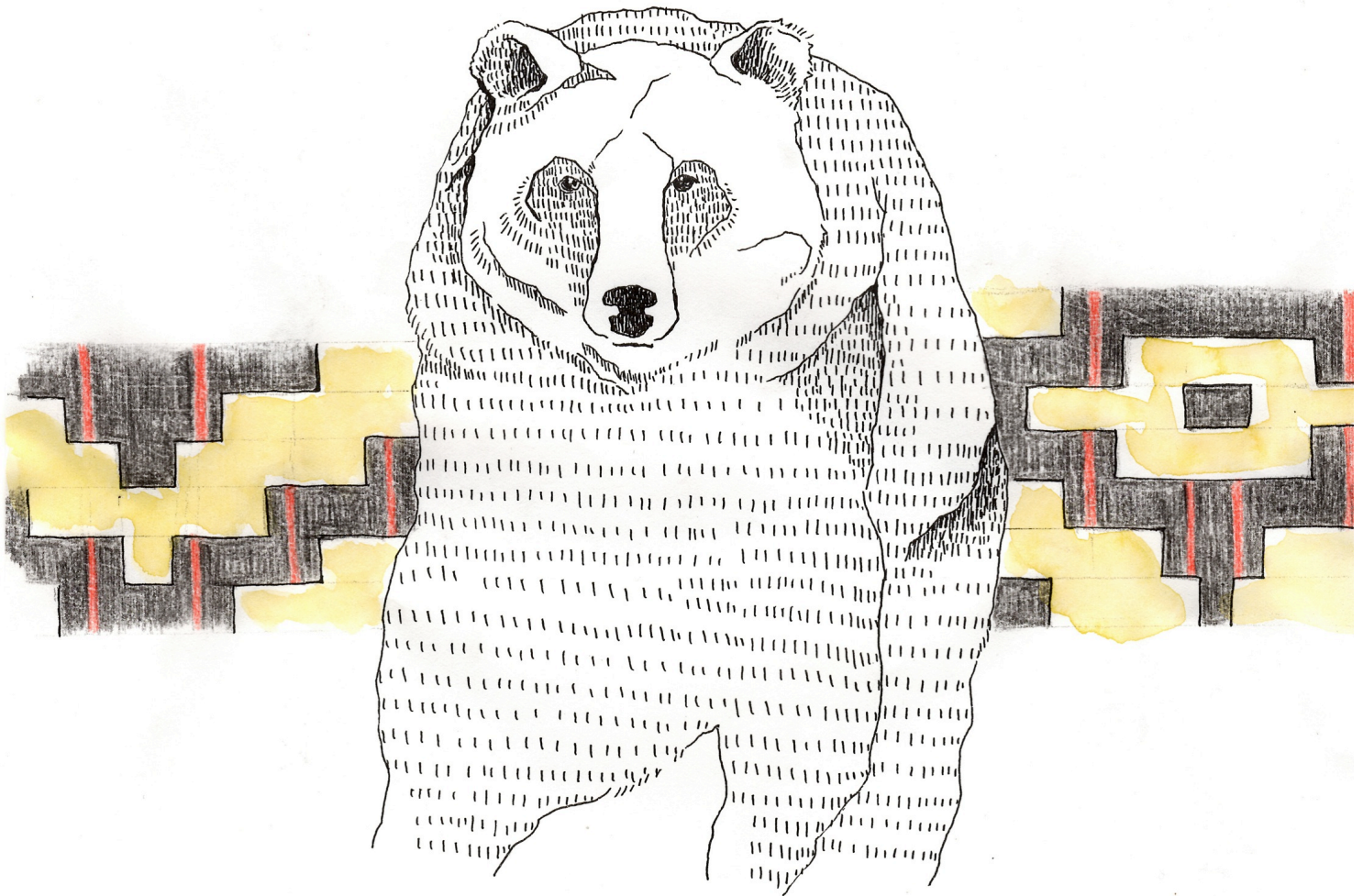
あのチライは、わしにこの想いを促すために、ここにきたのだろうか。

この旅の向かう先は、シリペツの河口なのか、それとも、チライの命が生まれた上流のさらにその先の、命のふるさと、アイヌの神の国なのか。

旅を続けるわしは、和人でもアイヌでもない、そのさらに源流で生まれたタケシロウ、わし自身に遡っていくのだろうか。

わしの神の国は、どこなのだろう・・・眠い・・・





第六話 タケオと尻別川

チライが消えた

チライが狩をしていた淵を離れて、カヌーはいくつかのプイラを越えた。大きな蛇行に挟まれて、いくつものプイラが立ち現れた。険しいプイラでは、お父さんはぼくを乗せたままカヌーから川の中に降りて腰の上まで水につかりながら、岩を抜ける急流に逆らわずにカヌーを引いていく。一度、ぼくも川の中に降りて、お父さんとカヌーの前後をそれぞれ押さえ、川底の滑りやすい岩を踏みながら流れに乗せた。プイラの急流がぼくの川にぶつかって渦になるとき、ぼくは一匹のチライになった。

プイラを越えたところでまたカヌーに身体を入れ、視線を前方に移したとき、あのチライがカヌーと同じ速度でのつたりと泳いでいるのが見えた。

「さつきは、ぼくの身体も川の中だったんだよ。きっと、そばで見ていたよね」

チライは、ぼくの視線が発した言葉を聞いても何の反応も示さず、微かに尾ひれを動かして水の流れを醸しているだけだった。

蛇行を左に曲がったところで、これまでで最も広い淵に出た。

・・・なんか、変だ・・・
この淵は、なんか変だ。

ぼくの中の川が、怯えている。

どうしたんだろう・・・

淵の向こうに、異様な光景が見えてきた。

川の流れの進む先に、水平線が見える。

見えるはずのない、川の水平線。

水平線の左端に、異様なコンクリートの塊も見える。

「お父さん、川の向こうが変だよ。どうなっているの？」

「ああ、あれは、発電所のダムだ。川の向こうが水平線のように見えているのは、あそこで川が堰き止められて落下しているんだ」

「ダム？ 尻別川にダムがあるの？ なんて？」

「全部で六ヶ所もあるんだ。水力発電のダムだよ。ここで水を貯めて、そこから地中の太いパイプで1キロくらい下流まで水を運んで、そこで水を落下させ発電用のタービンをまわしているんだよ」

「ダムがあると、カヌーはどうなるの？」

「心配しなくていい。ダムの手前でカヌーを岸に寄せて、ダムの端に作ってある魚道の傍の斜面を伝って、カヌーをダムの下まで運ぶから。タケオも、運ぶの手伝ってくれよ」

ぼくは、どうして不安な気持ちになったのか、わかった。

そして、すぐ、チライを目で捜した。

いない。

さっきまで、カヌーのすぐそばを泳いでいたのに、どこを見まわしても、あのチライがいない。

「お父さん！ チライが消えた！」

「ああ、さっきまで見えていたのにな。ダムがイヤなのかな。」

「チライは、ダムでどうするの？」

「どうするんだらう。お父さんにも分からないけど、ダムの下には行けないんじゃないかな」

「さっきお父さんが言ってた魚道って、チライは使えないの？」

「あれは、よっぽど水量が多い時でないと、チライやサケのような大きな魚には、昇るのも下るのも無理かもしれない」

「じゃあ、チライは、この川を自由に行ったり来たりする事ができないんだ・・・」

「ダムができる前は、川のすべてを自由に使って生きていたんだらうけど、今は、川はひとつに繋がっていないからね。でもね、さっきも話した松浦武四郎って人が、150年ほど前にアイヌと一緒にこの川を下った時も、ちょうどこの辺りで、かつて流送したエゾマツの原木が蛇行の辺りに引っかかっているのを見つけたという記録があるくらいだから、プイラが多かったことも含めて、尻別川って、いろんな顔を持っていた川なんだと思うよ。」

顔と言えば、昔のアイヌの人は、川は人間と同じように、顔も口

もお尻もあると考えていたようだよ。チライも、そんな人間のような川、川のような人間とはお互いさまで一緒に生きていたんだらうな。そう思うと、ダムって、川にとっては何なんだらうね。お父さんも、わからなくなってきたよ」

お父さんの話を聞いて、ぼくは、そうか、だからぼくの中に川が流れたんだ、と納得した。

ダムの向こう

「ねえ、ダムって、水力発電のためのものだったら、人間には必要だと思うけど、そのことをチライはどう思っているんだらうね。チライが思ってる、というのも変だけど」

「タケオがどう思うか、って、チライは気にしていたかもしれないね」

「どうして？」

「だって、チライは、タケオと一緒にずっとここまで来たんだらう？ チライは、ダムがあるこの先にこのままでは行けないけど、タケオがどんなふうにしたらチライと一緒にダムの向こうまで行けるか、って、タケオに謎掛けをしているのかもしれない」

「・・・ねえ、川はどこに行くんだらう」

「そうだなあ・・・。タケオの川は、どこに行きそう？」

「わからないよ。だって、川はダムの向こうで、ぼくの家まで行

って電気になっているし、別のチライや魚になっているかもしれないけど、ぼくの中を流れていた川は、ダムの方こうには繋がっていないような気がする。ぼくがその中にいて、ぼくの中にもあった川は、どこに行っちゃうのかな」

「そうか、分からなくなったか・・・。じゃあ、ダムの方こうはどんな川なのか、行ってみようか」

「うん・・・」

ぼくは、とても頼りない気持ちになって、川からもチライからお父さんからも遠い、たった一人の部屋の中に入るような気がして、不安な気持ちになった。

そのとき、そんな筈がないのに、誰かがぼくを呼んでいるような気がして、ダムと反対側の、今来た川上の方に目を向けた。

そのとき、ぼくは見たんだ。

光の粒が辺り一面にキラキラと舞っている、あの光景を。

そして、水鳥は飛んでいないけど、あのチライの大きな魚影が、光の塊を受けて逆光のシルエットになって、のったりと揺れながら上流を目指していく光景を見たんだ。

それが、実際の光景なのか、ぼくだけに見えた幻なのか、ぼくにも分からない。だから、お父さんにも言わず、ぼく一人でぼんやり眺めていた。

そうか。チライ、君はずっとひとりだったね。だから、君は、君

だけの川にもどっていくんだね。そして、いつかどこかで、ダムの方こうに行くぼくと、また会うのかもしれないんだ。ダムの方こうで、ぼくがどんなぼくになっていくのか、きみは川の中で、ただ黙ってそんなぼくを見詰めているんだよね。ぼくも一人で、さつき君と会ったあの光の中にいつか戻って行きたいけど、その前に、ぼくはダムの方こうの川に行ってみるよ。

ダムの方こうの川にも、君がいるといいな。

どこにいても、君は、やっぱり独りで のったり泳いでいるだろうし、ぼくと会ってもそっけなくしているだろうけど、でも、きつとぼくの近くで一緒に泳いでくれるよね。知らん顔しながら、ね。

第七話 エピローグ

川の生まれたところへ

「タケオ、ダムの下に移動するぞ。さっきから上流の方を眺めているけど、どうした？ チライが見えたのか？」

「上流の方、さっきの淵のように光の塊が広がっていたけど、お父さんにも見えた？」

「光の塊？」

「・・・いや、もういいんだ。そう、チライがその光の中に戻っていくのが見えたよ。影になって、のったり泳いでいった。」

「そうか、戻っていったか」

「お父さん、川がどこに行くのか、ぼく、わかったよ。川は、川の生まれたところにまた行くんだね」

「タケオは、何か感じたんだね」

「あのチライが、そう言ったんだよ。ぼくには、そんなチライの声が聞こえたんだ。チライじゃなくて、川の声かもしれないけど」

「そうか・・・。川は、まだ怖いかい？」

「うん。川は、やっぱり怖いよ。でも、怖くても、川は好きだよ。だって、川はぼくなんだ」

上流を見詰めていたタケオの耳に、すぐ下流のダムから流れ落ちる川の音が、次第に大きく響いてきた。プイラで耳馴染んだ様々

な光の色を含んだシリペツの声が、ダムから落ちるときは光を失って灰色に塗りつぶされ、巨大な管を流れる水の轟音になったように感じた。

「ぼくは、ダムの向こうにも行ってみる・・・」

タケオの眼の中で、光の塊が遠のきながら輝いていた。

(・・・終わり・・・)



■アイヌ語の表記について

本文中のアイヌ語の地名、人名、その他の名称の表記については、基本的には次の方針に沿った。個別具体については、注に補記する。

●登場するアイヌの人名は、全て『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』（松浦武四郎著／秋葉実編）の表記に従った。

●登場するアイヌ語の地名も、基本として全て『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』（松浦武四郎著／秋葉実編）の表記に従った。

●地名の「シリペツ」、その他のアイヌ語の名称については、『北海道の地名』（山田秀三著）、『アイヌ語入門』（知里真志保著）、『北海道蝦夷語地名解』（永田方正著）によった。

●また、一部のアイヌ語については、『静かな大地』（花崎皋平著）に従った。

※アイヌ語の表音表記法については、アイヌ語の特徴の一つである「閉音節」の末尾、 ㇰ 、 ㇱ 、 ㇴ 、 ㇵ 、 ㇶ 、 ㇷ 、 ㇸ 、 ㇹ 、 ㇺ などは、カタカナの「ク」「ツ」「プ」「ル」「シ」「ウ」「イ」「ム」を小さい印字で表記する方法が知里真志保などにより提唱され、新聞紙上でも広く見られるようになってきているが、ここでは、PCの出力制約により、依拠した文献に従って表記することとする。（知里真志保、山田琇三）

■本文中のアイヌ語等に関する注

※（ ）内の数字は、初出ページ
シリペツ（1）・・「尻別川」の語源となったアイヌ語。永田「地名解」や山田「北海道の地名」によると、「シリ・ペツ shiri-pet 至高川」であり、アブタ

アイヌによる説では、「シリペツ」の山は小さいけれど、その水源は高いところから来ているので、この意味合いの名前になった、という。また、「シリ・ペツ shiri-pet 山の・川」という解釈も述べられている。この二つの説では、意味も発音も違うことから表記が異なってくる。ここでは、永田説を踏んだ山田説に従って、「シリ・ペツ shiri-pet 至高川」（山田秀三より）とする。

なお、「しりべし」とは語音が似ているが、「しりべし（後方羊蹄）」はアイヌ語ではなく、語源はまったく異なり、『日本書紀』まで遡る。（山田秀三より）
プイラ（9）・・「激流」「瀬」などを表すアイヌ語。（山田秀三より）

チライ（11）・・「イトウ」を表すアイヌ語。「オペライペ／オプイラメ」等とも言う。尻別川のイトウは他川のイトウと異なり魚体が大きく「オプイラメ」と称されているが、松浦武四郎の「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌」では「チライ」と記載されているので、ここでは「チライ」と称することにする。（松浦武四郎「丁巳日誌」、知里真志保より）

ニシパ（16）・・「紳士」「旦那」などを表すアイヌ語。和人男性への敬称としては、「トノ」もあるというが、ここでは、花崎「静かな大地」で使われている「ニシパ」を採った。（花崎皋平より）

カムイ（17）・・「神」を表すアイヌ語。日本の「神」とは、完全には一致しない。（ポンカンピソツ」より）

マレプ（17）・・魚を捕る道具「鉤鉈」を表すアイヌ語。（アイヌ生活文化再現マニユアルより）

ハキイチヤン（17）・・喜茂別町尻別地区の国道丁字路付近と思われる。アイヌ語で「鮭の浅い産卵場所」の意味。（松浦武四郎「丁巳日誌」より）
パンケメナ（17）・・京極町の現市街地付近と思われる。（松浦武四郎「丁巳日誌」、『武四郎と尻別川』より）

ソウツケ(17)・・・倶知安町のソウスケ川と尻別川の合流地点周辺。「ソウツケ」の語源については、山田秀三は「ソッキ 鮭床、鮭の集まるところ」がなまっていた地名としている。山田秀三も同様の解釈。(松浦武四郎「丁巳日誌」、山田秀三より)

イナウ(17)・・・和人の民具「木塀」「削りかけ」と似ているが、「イナウ」はそれ自体が神への供物でありメッセンジャーであり、神の世界には存在しない「イナウ」を、器用な人間が作って神に贈ることで、人間の意図を神に伝える。カムイノミにはなくてはならないものであり、ヤナギ、ミズキなどから削って作られる。(「ポンカンピソツ」より)

カムイノミ(17)・・・アイヌがカムイ(神)に祈る儀式。様々な祈りがあるが、たとえば、狩や漁で獲物を仕留めた時は、その獲物を人間界に贈ってくれたカムイに対して感謝し、獲物の姿をまもってきたカムイをカムイの国に送り返す儀式などを指す。(「ポンカンピソツ」より)

カムイチェブ(18)、チェブ(17)・・・「魚」を表すアイヌ語が「チェブ」であり、その中でも、「鮭」を「カムイチェブ」と称した。(知里真志保より)

コタン(18)・・・「集落」を表すアイヌ語。通常、数戸の家で構成され、10戸以上は稀で20戸以上のコタンは場所請負制などによる強制移住の結果が多い。

イオル(19)・・・狩猟や漁労における部落世襲の縄張りを示す空間。(知里真志保より)

フレナイ会所(31)・・・松前藩の虻田請負場所を幕府が直轄にし、請負制度を廃止し「会所」としたが、その後有珠山の噴火で全滅したことから、会所をフレナイに移した。

ハポ(31)・・・「母」を表すアイヌ語。(知里真志保より)

ウタリ(31)・・・アイヌ民族が同報を指す言葉。親類という使い方もある。(知

里真志保より)

ウエベケレ(31)・・・アイヌにおける散文物語を指す。主に、北海道西南部における言い方。(知里真志保より)

チャランケ(32)・・・アイヌの集落間あるいは個人間で、社会秩序に反する行為があつた時に行われる、談判や論議などによる秩序回復の行為を指す。

マライトウ(35)・・・現在の長沼町馬追沼のあたりを指す。(花崎皋平より)

■参考文献

丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌(松浦武四郎著／秋葉実編)

北海道の地名(山田秀三著)

北海道蝦夷語地名解(永田方正著)

ポンカンピソツ(北海道アイヌ民族文化研究センター)

アイヌ生活文化再現マニュアル(アイヌ文化振興・研究推進機構)

知里真志保著作集(知里真志保著)

カムイノミを語る(葛野辰次郎／野本正博)『アイヌの本』宝島社

静かな大地(花崎皋平著)

アイヌの世界観(山田孝子著)

武四郎と尻別川(NPOしりべつリバーネット)

ニセコ町百年史(ニセコ町刊)

地形図(国土地理院)

絵について（奥村頼子／画）

【三枚の絵】

生と死を幾重にも循環しながら繋いでいる、自然と人の永遠の関わりを感じたい・・・

自然の美しさも残酷さも、それ自体はなんの価値も意味も有していない、ただそのもの。

その中に人間が持ち込む価値付けや意味付けは、人間の都合であってそれ以上のものではない。

しかし、かつてこの地には、ただそのものとして自然への敬意と畏れを大切に生きた人々がいたことを、私たちも、五感、六感の全てで感じ取りたい。

そのようにこの絵を見つめ、感じ、そこから、価値や意味を超えた自然の摂理、啓示を受け止めたい。

【絵①：チライの眼／14ページ】

チライの眼は、生とも死とも感じさせる虚無の表情で、川の流れそのものを見つめている・・・

世界を360度写すレンズに模される、魚の眼。

それは、自然界の広がりを書し込むだけではない。

自然界と世界を巡る生と死の多様な絡み合いをただそのまま写す、命の変容が渾然となった球体宇宙。

【絵②：エゾシカとトリカブト／28ページ】

エゾシカが、トリカブトの花畑で、神経を研ぎ澄ませながら何かを見つめている・・・

アイヌの狩猟は、毒性の強いトリカブトの根を矢に塗って、エゾシカなどを射止めた。

狩猟したエゾシカの身体は神からの贈り物と感謝して受け止め、その命をイナウとともに神のもとに送り返す祈りを捧げた。

【絵③：ヒグマとイオマンテ／38ページ】

コタンで大切に育てられたヒグマの子が、儀式の中に漂う自分の命を見つめている・・・

親子のヒグマを狩猟したアイヌは、親グマを仕留めて神のもとに送った後、子熊をコタンで大切に育てる。

そして、成長した子熊を丁重な儀式によって神のもとに送り返す。アイヌのこどもは、このイオマンテで命を学ぶ。

あとがき

私たちは、ニセコ町の様々な環境課題やエネルギー政策が由来し依拠している自然環境・自然生態系を、いったいどこまで知っているのでしょうか？

「ニセコ環境白書（総集編／データ編）」は、そういった環境の根本に触れるところについては、記述していません。

しかし、私たちは、そのような自問をもとに、私たちの暮らしやまちづくりの基盤となっている自然環境・生活環境・エネルギーなどについて、想いを巡らしています。

その自問を支える私たちの共通認識は、私たちは自然生態系のほんの一部しか知らない、ということです。むしろ、知らないことばかり、という謙虚な姿勢が何より大切である、と言い換えることもできましょう。

この姿勢を改めて自らに問い、深めていくためのきっかけとなる視点の一部を、ここでは、「ニセコの環境ものがたり シリペツの声」として、考えてみました。

この物語に登場するタケオとお父さんやお母さん、タケシロウと四人のアイヌ、そして、チライとシリペツ、それぞれの切り口からこの物語の世界に入っていく、私たち一人ひとりも物語の登場人物として、「川の行方」のその先に、それぞれの道を見つけて

いきたいと思うのです。

そのような、一人ひとりにとっての「シリペツの声」を聴こうとする生き方の模索が、「ニセコ環境基本条例」「ニセコ環境基本計画」「ニセコ環境白書」を、生き生きとした言葉と行動の指針へと深めていくにちがいありません。

この物語は、多くの方々から専門的なお話をお聞きし、現地に赴き、内省的で想像的な思索を重ねつつ、さまざまな観点からのご指摘と議論を経て、このような内容になったものです。

改めて、この場をお借りし、みなさまにお礼を申し上げます。

■文

梅田 滋

■絵

奥村頼子

■監修

ニセコ町環境審議会

■取材協力及び校閲

南 重光（ニセコアウトドアセンター）

下田伸一（ライオンアドベンチャー）

吉岡俊彦（尻別川の未来を考えるオビラメの会）

川村洋司（尻別川の未来を考えるオビラメの会）

ほか多くの方からお話をお聞きしました

■発行

ニセコ町企画環境課

2017年3月